

目次

小さな人形 南原充士	2
シルバーカーと一緒にね 鵜飼千代子	2
オペラ「同級生夫婦」第3回 有働薫	3
原稿「ブロンテ牧師館にて」 南川優子	5
アブサン土偶 海埜今日子	6
枝先にて震えが伝わり 富澤守治	7
骨組み 清水鱗造	8

小さな人形

南原充士

ここに 小さな人形がある
ふしぎなかたちをした 小人のようだ
それがなぜか 調子はずれの音を出す
わたしの胸が きりきりと痛むときに

それはまた こきぎみにふるえる
空の彼方からやって来る 微弱な電波を
とらえるシステムが 内蔵されているのだろう
なぜか わたしの頭の芯が 痛むときに

それはまた かすかな光を発する
蓄光石のように 暗い夜の行方を
わたしの先に立って 照らしてくれる

ときには 遠い過去から 数々の思い出を運んでくる
わたしが力尽きて 崩れ落ちようとするとき
それらは 無数の涙となって わたしを濡らす

シルバーカーと一緒にね

鵜飼千代子

シルバーカーと一緒にね
まだ 51歳なのに色気ないけど
それがすつぴんのわたし

シルバーカーと一緒にね
会いに行くよ
冥土の土産に

もう、余生だよね
ナイフとフォーク使えなくて
わたしのお皿にサーブ
ケアしてもらった

離乳食用のお出かけカッターとか
持参していたんだけど
ありがとです

巧く助けてつて言えなくて
自分でしようとするので
かえって面倒増えたかな？
と思いつながら

姫様扱いしてもらいました
昔からそうだけど

この余生

あと何をして終えようか

去年 死にぞこなつたから
今がある

何か遺したいね

大きな事でなくていい
誰かの
個人の心に

どつかり居座れるようなことあつたら
いいね

冥土の土産
ありつたけ
それだけのことが全部

いいじゃん
それが幸せ
生まれた意味でも。

オペラ「同級生夫婦」第3回

有働薫

第2幕第1場

モーツアルト邸の居間：（テーブルの花瓶に赤いチューリップが活けてある。夫婦は寛いだ様子で初夏の午前中を過ごしている。やや太った中年のモーツアルト、陽気で身のこなしもゆったりしている。マリーも同様、往年の気品に加えて飾らないやしどけない様子、二人とも髪が乱れている）

アントワネット（ソファに寝そべて）：すごいことよね、街の娘も王女も同じ曲を弾いて毎日の午後を過すなんて。

モーツアルト：だからさ、ぼくは王様と同格、いや、王様にアドバイスする立場だったんだよ。そのことで、無能な貴族たちからねたまれたんだね、黒人たちを妬んでリンチを繰り返したアメリカのプア・ホワイトたちのように。命を奪われなかつただけぼくはラッキーかな。

アントワネット：わたしの一番上の兄さんが、もうしばらく生きていてくれたらね！ 兄の死であなたははしごをはずされちゃったのね…

モーツアルト：ヨーゼフ二世陛下がぼくの世間的存在の土台だった。ぼくたちはウマが合ったんだよ。

アントワネット：兄はあなたの音楽が好きだったのね、きつと…

モーツアルト：音符が多すぎるなんてクレームもいたんだけど、ぼくも負けずに「いえ、適量にございます、陛下」とやり返したさ… ござ自分で演奏なさるにはちよつと難曲だったかなあ（ひぎでピアノを弾くしぐさ、首をかき上げて困惑した様子の陛下の真似をしてみせる）

アントワネット：ある意味では幼馴染だったのですものね！

モーツアルト：母上の女帝陛下には乞食だつて言われた…：そう、芸術は乞食の仕事だよ、詩人だつて、通りで言葉を拾つて歩く、モク拾いだもの…だからさ、いま小鳥屋の親父がぼくの相応の身分だろうね。

アントワネット：はは、面白い…：再婚したからわたしは小鳥屋の女房ね！

モーツァルト・パペーノとパペーナ、ぴったりのカップルじゃないかね！
もうこの世の人間の義務は果たしたんだから、お互い、熾烈な……もう好きでいいんだよ！

アントワネット：もう死ぬこともないしね！

(二人で顔を見合わせて楽しそうに微笑み合う)

(しばらくピアノコンチェルト第2番♩59第2楽章が流れる)

(暗転)

(やややつれた様子のモーツァルトが机に向かって手紙を書いている)

モーツァルト：書きながら書いているものを読む)

オーストリア大公フランツ閣下 1760年5月

閣下

オーストリアウィーン宮廷楽長サリエリは有能な音楽家ですが、ここウィーンにおいてドイツ人たる土台の上に音楽を創造するについては、幼少より教会音楽に親しんでまいりましたわたくし、モーツァルトがご治世に適った音楽の創造に関しましてより適任かと日頃考えてまいりました。むろんサリエリ氏の指導力に異を唱えるものではなく、わたくしを副楽長にお任せいただければ、楽長サリエリの更なる活動を補強すべく協力してウィーン宮廷に創造的なる新しい音楽をもたらし得るものと拝察いたします。わたくしはサリエリ氏と同様イタリア音楽にも精通しておりますので、ともに壮大な音楽世界の構築に邁進しえますことをお約束いたします。なにとぞドイツ人の魂の表現のために、同国人の才能をお引き上げくださいますよう、伏してお願いたします所存でございます。閣下の音楽芸術に対する深甚なご賢察を祈りつつ……ウィーン室内楽作曲家、僕ウオルフガング・アマデウス・モーツァルト

(書きものをやめてつぶやく)

そうだ、サリエリもぼくを正当に評価してくれているのだから、協力してウィーン宮廷のために働くのがいちばん良い方法だ。何とか皇帝を説得したい、わたくしを正当な地位におつけくたされれば、ウィーン音楽界に素晴らしい成果が生れるだろう……

(ややあつて……絶望的な気分に襲われて、頭を抱える)

けつきよくのところ、ぼくはほとんど自力でぼくの天命を証明しなければならなかった、結果から見れば、この世に稀な音楽を自力で産み落として……力尽きた。死の年、1769年の作品の数々は痛ましいほどにも美しい……二度とは到来しないだろう奇蹟的な仕事……筆舌に尽くしきれない困窮の中で……

(暗転)

(湖畔を散歩するアントワネット、クラリネット協奏曲イ長調k62 第2楽章のメロデーが遠くから微かにかぶる。暗い舞台に3つのスポット。それぞれに姿が映る)

アントワネット：(つぶやく)あぁいい気持！

テークラ：庭先の井戸で水汲みしながら)ウオルフ兄ちゃん！

コンスタンツエ：(70の未亡人の姿でモーツァルトの銅像のレプリカを調べている、無言)

(第2幕第1場終)

原稿 プロンテ牧師館にて

南川優子

「Wuthering Heights (嵐が丘)の手書き原稿は 現存していません
だからこれは 来場者に一行ずつ書いてもらって 原稿を完成させると
いう
プロジェクト

来年の エミリの生誕二百周年に向けて
完成させるために」

シャーロットの夫の 書斎だったという部屋で
ガイドの女性は そう言って

わたしとあなたを出迎えた

大きな木のテーブルの上には 開かれた Wuthering Heights の 分厚い
本と

手書きの文字がつづられた 大きなノート

促すようなあなたの目を 横目で見てから

ガイドが指差す 一行を見る 「あなたの行はここです」

印刷の改行に従って 切り取られた 中途半端な意味の行

-ing her eye and snatching away his hand. "I shall be as
彼女の目を追いながら、彼は手を振りほどいた。「ぼくは

彼女 キヤサリンの目を追いながら 彼 ヒースクリフは

キヤサリンに触れられた手を 振りほどく
上流の家に滞在し 洗練されて帰ってきた キヤサリンが
荒野の仲間のヒースクリフに

「あなたとつても汚いんだもの！」と言い放ち
身だしなみを整えてと たしなめた後のこと

わたしは エミリのたどった道を 踏み締めるように
鉛筆でノートにつづる

-ing her eye and snatching away his hand. "I shall be as

そばに立つ あなたにつながる文を わたしは読む

dirty as I will, and I like to be dirty, and I will be dirty.”

好きなだけ汚くなってやる 汚くなりたいんだ 汚くなってやる。」

けれどあなたは 立ったまま 鉛筆を取ろうとしない

「書かないの？」と訊ねると

「文学的なのは きみだから」

ヒースクリフは 手をつながない

あなたは文を つながない

ふと わたしは 思い出す

あなたが ワイングラスを片手に 「詩からは何も

学べない気がする」と言った

遠い日の 土曜の晩の

食卓を

"I shall be as dirty as I will, and I like to be dirty, and I will be dirty."

好きなだけ汚くなってやる 汚くなりたいんだ 汚くなってやる。」

エミリの物語のなかに 佇んだままのわたしの横で

あなたは ガイドに話しかける

「この土地の方ですか？」

「今は 別の町に 住んでいます

子供のころ ここに住んでいて 父は 目抜き通りで

肉屋を営んでいました けれど 観光が盛んに

なりすぎて

別の町に 越しました」

アブサン土偶

海埜今日子

縄文に関する展覧会へ行った。楽しみにしていたのだが、何故かあまり感動しない。こうしてふりかえれば何かしら感動に気づくかしら。そう思ったのだが……。その場で観た時、土偶に関しては、それでも何かしら穏やかなものを頂いた筈なのに。写真撮影可能だったから、思い出すためのよすがにと、映像を持ち帰った。いつもなら扉をひらくように、それらは記憶を引き出してくれるのだが、この土偶たちは、そうではなかった。すこし怖いような気がした。かけらとなった壊された土偶が並ぶ。頭だけ、上半身だけ、胴体だけ。いつもは、祈りの声のようなもの、願いのつまった、たとえば慈悲的なものを、その姿に感じていた。だがそれは、比較的完全な姿に復元されたか出土したものたちに対してだったのかもしれない。今回のそれは、傷痕のようだった。額が欠けた、眠りのような顔、乳首であろう突起のある長方形、ふくらんだ腹かもしれない、概ねの丸さ。それら自体は、なるほど、それでも土のぬくもりが感じられたからか、ほのかに優しくかった。土偶は故意に壊された状態での出土が多い。呪術的に、厄災を祓うためという説があるそうだ。写真からは、負の気配が漂っていた。祝と呪、豊饒と喪失。流し雛を想起する。籠の船に乗って永遠へ流れてゆく、雛の顔の満ち足りた水葬、あるいはオフィリア。彼らはこんなにも、わたしたちを見つめるために眠っている。

展覧会の帰り道、久しぶりにアニス系の強い、甘いリキュール、アブサンが欲しくなった。こうして机に向かうときの、そのお供に。十九世紀の芸術家たちに愛好されたお酒。ヴェルレーヌ、ロートレック、ゴッホ。この来歴に惹かれ、以前はよく飲んでいた。あの頃に帰りたいというより、あの頃のよ

うな気持ちで、書くことをしたくなつたのだと思う。買う時、嬉しさが漂つたのは、久しぶりだったからだけではない。お酒をかうという行為が、ほぼ日常から非日常になつていたからだ。こんな風に日常のなかで、非日常を経験すること、通底奏音のように継続させること。それこそが書くという行為ではなかつたか。おおよそつばにいえば、わたしが縄文にひかれるのは、これらのことも関係している。日常が今よりもつと非日常と連結していた時代。火焰型土器の使いにくい、あの不安定な形、美に突出したそれは、まさにそうではないか。展覧会の記憶がまたよみがえる。黒曜石の石器たちが、眼裏に燦然と並ぶ。研磨された、黒い輝きは、道具だつたが、それを超えた、所作であり、美だつた。

これを書いて今、買ったお酒を飲んでいる。記憶のとおり強いお酒だが、覚えているよりもずっと香りがよい。漬け込んだ草たちが口のなかでほとぼしる。甘さが優しい手招きとなつて。かつて、こんなに怖いと思つて飲んでいただろうか。草の音(根)が、土をたたえて眠っている。

初出「エウメニデス」53号

枝先にて震えが伝わり

富澤守治

枝先にて震えが伝わり

暗闇の夜を越えて、朝日が差し込むころ
わたしは自らの知性を疑い、それも非合理的な夢の話の筋道から抜け出せ

ず

ただ起きようとする意識が意識を目覚まし

また枝先の朝露のごとく、さざなむ表面張力の、水玉のふるえのごとくとまどつている

そういえば昨夜、ある女が近づいてきた、暗闇の帰りの広場で

このひと月ほど、警戒していた

これも欲か愛かの大樹の枝先に震えが伝わることか

この世は男と女の性差であふれているのだ

悲しみの夢のなかで目覚める

荒れた青春のあと、すぐにやってきた死の淵に沈んだこと、病い

伝え聞く女(ヒト)の恋ごころにも応えず

もうすぐわたしは死ぬだろうと、控えめにしていた

ただ、枝先にて震えが伝わっただけ

わたしの恋ごころに背いて、相手に伝えず

悪夢とも言えず、良しからぬ夢、

いつのこと多賀の宮居に行きしこと懐かしきともまた往ければと

こんなことでも懐かしい

枝先にて震えが伝わる夜明け、しかし数十年が経ち、あの死神だけは打ち倒したか？

さらにどういうわけかいまも道があり、その道を往く年老いたわたしはわたしの身体を引きずり、生きる

暗闇の夜を越えて、自ずと朝日は差し込んでくれる

いまわたしは自らの知性を疑うこともない、そして非合理的な夢の話の筋道

から抜け出そうとしてもがき

起き抜いた、こころはまどうことはない

いまも再びまた青春の風は吹き薫り、吹き渡り

また枝先の朝露のごとく、さざなむ表面張力の、水玉のふるえのごとく

枝先にて震えが伝わり

やがて、春が来ればと願う

骨組み

清水鱗造

骨組みだけの船がすぎる

前に板が張ってあったのか

これから張るのかわからずしまい

花がぼわぼわ咲いたり

たちまち枯れたり

骨のあいだで点滅する光

日なたの猫

日なたの猫

空中の粘土で

鳥の形を作る

魚の形もまた

鳥と魚の骨組みが

よぎり

深い眠りの底へ

猫は食事と呼ばれるまで